

水・食料



風呂おけが前夜の水で満たされていたことは助かった。トイレや洗面に使った
(須磨区、66歳女性)



雨どいを改造し、日常から雨水をためていたのが役立った
(須磨区、37歳女性)



冷蔵庫に入れなくて良い乾物類を買い込む習慣が役立った
(垂水区、67歳女性)

電気・ガス



懐中電灯はヘッドライト型を。両手が使える
(東灘区、女性)



被災時、父母にもらったカセットコンロが非常に役立った
(長田区、50歳女性)



乾電池の予備は重宝した
(中央区、52歳男性)

持ち出し品



まとまったお金を置いていたので、銀行が開かなくても心配なかった
(中央区、55歳女性)



被災後はどこに何があるか分からない。非常持ち出し品は出入り口近くに
(中央区、52歳男性)



筆記具は書き置き、伝言など、情報をメモするのに役立った
(中央区、52歳男性)

家具・食器



高いところに重いものを置いていたが、それらを低いところに入れ替えた
(北区、51歳男性)



寝起きしない部屋に大きな家具をまとめて置いている
(垂水区、69歳女性)



お皿（紙皿）の上にラップを敷くと、洗わなくて済む
(東灘区、女性)

住まい・地域



地盤が軟弱で、基礎工事にお金がかかったが、それによって被害が軽かった
(東灘区、77歳男性)



すぐ近くで火事があった。逃げる際は配電ブレーカーを切ることを守りたい
(東灘区、64歳女性)



震災前からよく歩いていたので、電車やバスが止まっても歩こうという気になった
(須磨区、65歳女性)

阪神・淡路大震災から20年がたった。世代交代が進む中、その経験と教訓の継承は被災地の大きな課題だ。日本列島は地震のみならず、洪水・高潮などの水害、土砂災害、噴火災害などあらゆる災害リスクにさらされている。被災した人々が苦難の中から生み出した知恵に学び、次への備えに生かしたい。
(森本尚樹)

市民の経験と教訓

DISASTER FILE III

あの日の苦難 次の備えに

神戸市は1999年7～9月、震災から5年を前にした総括・検証事業の一環で、震災で得た知恵を市民から募り、494件が寄せられた。うち約200件を冊子にまと

めたほか、市のホームページ（HP）でも「あのとき役立った私の知恵」として公開している。寄せられた知恵の多くは、日常生活にひと工夫を加え、

水や食料の備えにつなげて役立つもの▽被災生活で予想外に重宝したもの▽被災後に役立った日常の習慣や備え▽被災後に感じた備えの反省—などだった。

「1月17日ができるだけガラガラか」などの提案もあった。神戸市のHP内の掲載アドレスは、<http://www.city.kobe.lg.jp/safety/prevention/wisdom/>

※神戸市が1999年度、復興の総括・検証の一環で市民から募集したもの。年齢は1999年度当時

このシリーズは第3月曜日に掲載します。次回は3月16日です。「DISASTER」は「災害」を意味する英語です。

SHEET 0170 ひょうご防災新聞